

寧波商人と中国近代金融

—上海の事例研究—

庄 晨

本論文では、寧波商人を中心に、錢莊の高速發展及び衰退變遷に沿って、寧波商人の特徴、商業モードの独自性が近代金融の發展における促進力について論述を加えていきたいと思われる。

第一章（はじめに）では現代中国は第二のグローバリズムとの出会いを経験しつつある。

その第一の機会と言うのは19世紀の世界經濟との出会い、いわゆる「西洋の衝撃」であった。中国はもともと經濟的には先進地域であったため、世界經濟との出会いにおいても自身の持つ經濟運営の手法と外から来た手法との接合に悩むこととなった。日本の欧米化が比較的早く進んだのに対して、中国の西洋受容が漸進的であったのは、中国が經濟的・政治的・思想的に独自の体系を形成していたためと考える。この中国世界の独自性は完全に払拭されずに、現代の第二の「西洋の衝撃」を迎えているが、この時にあたって過去の経験を振り返ることには意味があると考えられる。

一方、1970年代の西側との国交正常化以来、アメリカを代表として「関与政策」が採用されてきた。しかし近年の中国とアメリカそして世界との摩擦の背景には、中国異質論の台頭が見られる。この中国異質論を考える上においても、「西洋の衝撃」に中国がどのように対応したのかは重要であると考えられる。

以上のような問題意識をもって、本稿では中国商人の經濟活動を振り返ってみることとした。

第二章（寧波商人と中国近代金融）では寧波商人及び付きまとう錢莊の歴史、紡績業と工商業での發展、金融機構との連携について論述を展開している。

寧波商人は明朝後期から清朝初期のが形成期であり、1840年のアヘン戦争勃発前後になると、大きな發展を遂げた。アヘン戦争後、寧波商人は独自の特殊な有利な条件によって、新興の対外貿易分野に迅速に介入し、商人と輸出入商人を買収することに代表される寧波商人という新式商人を形成した。次に、錢莊の歴史を振り返ってみた。宋朝から寧波は南方の金融商業の中心地になった。明中期以後、海外貿易によって銀元が流入すると、銀元と銀両の兌換の両替が必要となり、兌換から預金や融資の業務を行う金融機関として錢莊が生まれた寧波錢莊一番の特徴は過帳制度を持っている。19世紀末期から始まった過帳制度は、やがて1945年後の新中国にて公私合営がばかられていった。一方、寧波錢莊は発達した過帳制度をもちに、20世紀前半までは輝いていたが、後に、海外金融危機及び上海からの影響に、内部の対応遅れなどといった内外的ダメージにて、過帳制度も寧波錢莊とともに崩れた。寧波商人による紡績業と工商業では、寧波商人が紡績業をはじめとする実業及び金融をはじめとする商業を分断した發展ではなく、お互いに結び、發展をしている。それに、新興企業と金融機構の連携では、紡績業と工商業には密接な関係性を持っているため、資金を企業間へのフレキシブルな流動を実現させるには、金融機構の開設となったわけである。こうすることで、自身が持つ実業たちに資金支援が常備できるうえに、金融業の更なる發展をも果たしたわけである。こうした大きなビジネスを成し遂げたには寧波商人がメインとなる。

第三章（寧波商人の特徴）では寧波商人の特徴について、家族式運営モード、中国近代資本主義

による国際化運営モードとの対比といった二つの面から論述をしている。寧波商人は親縁と地縁の絆で結ばれた商人集団であり、同郷観郷誼との連絡は寧波商人が社会資本、人脈関係を構築するための最も重要な資源となり、それによって宗族関係と家族感情に根ざした社会関係ネットワークを事業発展にの内駆動力と推力となったわけである。寧波商人は同郷関係を重視することを出発点とし、家族関係を重視する出発点としている点は同等の性質を持っている。それに、寧波商人は鋭い目力を持っていて、先進的な管理モードを積極的に取り入れる革新的な姿勢が見られる。西洋の先進的な経営管理者の学習と参考にすることを非常に重視している。近代中国では、寧波商人は西洋の先進的な管理方法を企業経営活動に導入した最初者である、彼らは西洋のものをそのまま写すのではなく、中国社会との実際と結びつけて、中国の伝統的な管理思想から栄養を吸収し、長所を博し、それによって形成された。中国の特色ある企業管理モデルは、企業に強い競争力と生命力を持たせる。今の企業管理にも影響を与えられるのではないかと考えられる。

一方、時代の発展とともに、新中国成立後では金融システムの改革を迎え、従来の金融制度に変化を与えた。第四章（新中国成立後の金融体系）では、親中国成立後の金融変化について、錢莊の消滅と国有銀行の台頭といった二つの面から論述を展開している。錢莊にとっては、古代経済から発展し、発展の過程で大きな役割を果たした。しかし、近代中国は動態的で、対外開放を余儀なくされた社会であり、外国金融機関の進出と自国の金融外部環境の激変は中国の金融機関の発展に大きな影響を与えた。新中国成立以来、一貫して中国の国情から出発し、金融システムを構築してきた。国民経済の回復期には、民間金融業をガバナンス・整備し、国家銀行を主体とした多元金融システムを構築した。錢莊は変革を余儀なくされた中で発展し、改善したが、最終的に終結に向かった。新旧制度が入れ替わる時、社会主義の改造を受け、錢莊が存在を薄めていくことは必然であった。改革開放後、金融資源の配置は市場配置メカニズムに転換し、政府と市場の関係を比較的に効果的に解決し、金融システムの発展を促進し、経済の発展も促進した。

第五章（現代金融に与える啓示）では、現代金融に与える啓示を中心に論述を展開している。いかなる事物にもその発展と消滅の歴史があり、錢莊はその隆盛と衰退の過程の中で、現代金融の発展に大きな啓示を持っており、特に現在我が国は金融分野を徐々に開放し始め、中国の開放経済条件の下での各種金融問題を解決するために現実的な参考意義を提供している。市場競争メカニズムを整備し、行政独占の禁止；金融機関の組織と管理メカニズムの改善といった二点から説明を加えている。

本論文では、寧波商人を中心に、錢莊をはじめとする金融業界の変遷に基づき、寧波商人による錢莊及び近代銀行、寧波商人による紡績業と工商業、新興企業と金融機構の連携中国近代金融に与える影響を明かす。それに、寧波商人の特徴を家族式運営モードから説明を加える。それに新中国成立した後の金融体系を錢莊の消えと国有銀行の台頭といった二つの面からその変遷を取り上げている。最後には、錢莊をはじめとする近代中国の金融制度及び変遷が現代記入に与える啓示を導き出している。

今後には、国内の行き詰った景気から、コロナに更なるダメージを与えられている実情に加え、如何に国内的安定及び国際的協和を保っていくには、大きな政策の取り込みが求められている。中国をはじめとする新興国の銀行システムの政策調整及び住宅業界のバブル崩壊を経由に、世界的金融危機の発生が考えられる。そこで、中国近代金融史の研究から現代金融システムの改善方向を明かし、金融システムをかためられるのではないかとと思われる。